

中学生部門 愛知県最優秀賞

## 「一歩踏み出す勇氣」

豊橋市立南陽中学校 三年

### 鬼頭 美幸

吃音。この言葉を聞いたことがありますか。吃音とは話すときに言葉が詰まったり繰り返したりする様子が見られる言語障害です。このことを知っているという人もいれば、まったく知らないという人も多いと思います。

私は小さいころから吃音を患っています。私はこの音が言いくいという明確なものはありません。なので、突然言葉が出てこないことや言いたいのと言えないということが多かったです。このこともあり、学校生活で友達と話しているとき、授業の時、人前で発表などをするとき、言葉が突然出てこなくなり、自分自身で焦ってまた出てこないなど、自分も困るし相手も困らせてしまう。

私は昔から話すことが好きだった。だから誰かと話したりコミュニケーションをとることを積極的に行った。でも、話すことで吃音が出て、からかわれたり、馬鹿にされたりすることもあった。それから話すことが好きだった私が、話すことが怖いと思うようになった。しかし私はこのことを誰かに話すことができなかった。たとえ家族でも、学校の先生でも友達でも。もし話したときに何を言われるんだろうという不安から言い出すことはできずにいた。

中学生になってからは吃音の頻度が減っていった。私は「吃音の訓練をした成果が出たんだ」と思い、うれしかった。でも、簡単にはいかなかった。良い状態の時もあれば悪い状態の時もあった。私は「いつまで続くんだろう」と悩んでいた。このことが顔に出たのか学校で友達が声をかけてくれた。私は友達に一回話してみようと思いい、私が吃音を患っていること、いつまで続くのか不安に思っていることなどを話した。友達は私が話し終わるまで真剣に話を聞いてくれて、学校生活困ってない？などいろいろ気にかけてくれた。私はすぐうれしかった。ずっと心に刺さっていた氷が解けていくような感じがした。

中学二年生の頃、吃音の訓練を行ってくれている

先生が私に「吃音はきれいに全部治るものではない」と言った。私が一番気にしていたことだった。私は一生吃音とともに過ごしていくのかと思うとつらくなった。でも、私は友達に吃音のことを話してから、すぐ勇氣をもらった気がした。だから私は前よりも前を向けるようになった。

私は今も吃音のことで悩んでいる。みんなと同じように普通に話せたらと何度も思った。でも吃音があっても私は私だ。と勇氣をくれた友達。その勇氣が今、私の背中を押してくれる。

私は障害のある人に寄り添い、考えるのが大事だと思っている。表面でとらえるのではなく、心でつながることが大事なのだと思は思う。